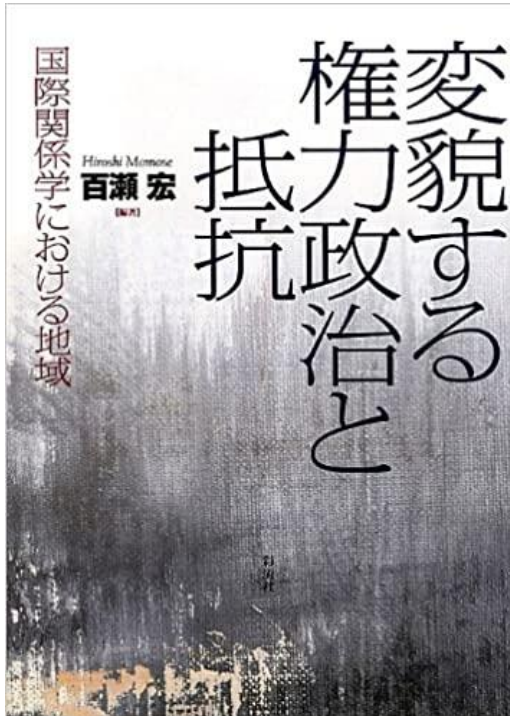




変貌する権力政治と抵抗—国際関係学における地域—

百瀬宏編著

彩流社、2012年

変貌する権力政治と抵抗—国際関係学における地域—百瀬宏編著

高橋 和（国4）

本の奥付をみながら、この本が出版されてからもうすぐ10年になることに驚いています。

そのような「古い」本をご紹介させていただくのは、この本が津田塾大学大学院で百瀬宏先生に師事していたゼミ生6名と百瀬先生による論文集であり、津田塾のめざす国際関係学の一里塚となっていると考えているからです。これぞ津田塾の国際関係学という国際関係学のシュレーを目指す試みでした。

収録している論文は、菅原淳子（二松学舎大学）「1860年代のブルガリア人移民社会とバルカン諸国」、大庭千恵子（広島県立大学）「代案としての国際運動—両大戦間期のマケドニア運動」、志摩園子（昭和女子大学）「ラトヴィヤ共和国成立史—研究史からみえるラトヴィヤ国家独立基盤の脆弱性」、大島美穂（津田塾大学）「第二次世界大戦直後のノルウェーにおける暫定政権の形成—戦後世界の考察の一助として」

高橋和（山形大学）「欧州における下位地域協力の展開—近代国民国家体系への挑戦」、小柏葉子（広島大学）「太平洋島嶼諸国における『市民社会』のリージョナリズム参加と平和構築の展望」と百瀬宏「戦後フィンランドの対ソ政策—『小国』のリアリズム再考」の7本です。（所属は執筆当時のもの）それぞれの論文は、国際関係においてマイナーな地域を扱っています。パワーポリティクスが貫徹する国際関係において、小国や国家ではない地域は主要な行為体と見做されてきませんでした。しかし小国や非国家行為体としての地域は、そうしたパワーポリティクスに抗い、自分たちの意思を通すにはどのようにしたらいいのか知恵を絞り、それを実現してきました。こうした事例は、現代社会においてのみならず、歴史的にも見出すことができます。

私たちがこの本で主張したことは、日常の生活の中にこそ国際関係を変えていく原動力があるということです。津田塾の同窓生は、台所の窓から見る世界に国際関係が宿っていると言っていました。言い得て妙だなと思います。

この本のもうひとつの試みは、学生時代のゼミの再現です。それぞれの論文の後に百瀬先生のコメントがあり、それに対する著者のリプライという構成で作っています。学生の際はゼミの時間に先生のコメントにどのように応えたらいいのか、ハラハラドキドキしていました。今日は上手く答えられたと思っていたのに、玉川上水脇の遊歩道を歩きながら、反芻してみると「質問の意味を取り違えていた？」と冷や汗をかいたり緊張の場面しか思い出せないのですが、卒業後数十年を経て、それぞれが研究者として頑張っている状況で、先生との対話はどのようなものになるのかなという遊び心からでした。結果として、問題の所在が明確になり、それぞれの論文の論点がクリアになりました。読者にとっても読みやすいものになったと思います。学生時代のような勉強不足から生じる緊張感はなくなりましたが、研究者としてのそれぞれの成果を先生がどのように評価されるのかなという緊張感がありました。

この本は、30年前の百瀬先生の還暦のお祝いの席で、当時まだほとんどの人が就職できていない中、古希にはなんとかみんなでお祝いの本を作りますとお約束したことが発端です。古希どころか喜寿にも間に合わず、大幅に遅れてしまいましたが、ゼミの仲間が全員研究者として就職することができて、本が完成することができたので、私たちゼミ生にとっては記念すべき本となりました。

百瀬先生近況（2020 年年 1 月 12 日 先生の御自宅にて）

今年先生は 89 歳になりました。お元気です。

